

平成23年度研究助成 【音楽振興部門】より

…音楽の現場では…

～アウトリーチ活動におけるインターアクティブ・パフォーマンスの研究と演奏実践～

現場からの報告

標題のテーマは音楽振興部門の第1回助成対象となった大類朋美氏（国立音楽大学及び洗足学園音楽大学ピアノ講師）の研究テーマである。大類氏のアウトリーチ活動に当財団事務局が同行して取材したので報告する。

1. はじめに

アウトリーチという言葉の定義は現時点では必ずしも明確になってはいない。一般的には、音楽におけるアウトリーチ活動とは、クラシック音楽の生演奏に触れる機会が少ない地域や人々に対して、音楽家や音楽団体が出向くことをいう。広義にはコンサートホールの外で音楽活動をおこない地域社会に貢献し活性化することである。

クラシック音楽に縁遠い市民が多くいる現実を好転させるため、身近な環境でクラシック音楽の醍醐味に触れて音楽の価値を受け止める機会を提供し、クラシック音楽が市民へ広く浸透することを目指す。このような活動を通じて未来の聴衆の出現を期待し、音楽ホールでの本格的な演奏会に足を運ぶ導入的役割を果たしていく。

2. アウトリーチの実践現場と背景

今回の実践場所は神奈川県川崎市立上丸子小学校である。上丸子小学校は東急東横線で渋谷から20分、新丸子駅から徒歩5分ほどに位置す

る。周囲には高層マンションが点在し東海道新幹線と横須賀線が側を通る都会の学校である。川崎市の音楽教育振興活動の一環として上丸子小学校の先生を通じて大類氏にアウトリーチ活動が依頼された。

川崎市では市制80周年の2004年4月に市民団体「音楽のまち・かわさき」推進協議会が発足し、音楽を中心とした市民の多彩な文化・芸術活動の創造を通じた活力とうるおいのある地域社会づくりを目指している。また、洗足学園音楽大学や昭和音楽大学が地域に根ざした取組みを展開し、企業オーケストラの盛んな活動なども川崎市の特徴となっている。

3. アウトリーチの実践内容

当日（平成23年10月16日）は10時45分から11時30分までの45分間の音楽授業時間の枠が当てられた。会場は校内の音楽教室であり、参加した生徒は4年生の100人程度であった。

演奏者は大類氏のピアノに、小山 清氏（元日本フィルハーモニー交響楽団所属）のバソン、萩森幸子氏（フリー奏者）のオーボエが加わったトリオである。

音合せの後、導入曲としてモーツァルトの“アイネクライネナハトムジーク”の第1楽章が3人で演奏された。

次に楽器紹介、オーボエとバソンがダブルリード楽器であることを説明。リードは1秒間に

何百回と振動して人間の声帯に当たること、プラスチックのストローでも吹き口を工作すればリードの役目をして長ければ低い音、短ければ高い音が出せること、長さを変えなくても孔を幾つか開けて開閉することで音階が出せることなどを実物を吹きながら説明。子供達はのどに触りながら声を出して声帯の振動を確かめたり、ストロー笛で音階が吹かれると「オーッ」とびっくりした歓声があがった。

次に、チャルメラを取り出してリード楽器の仲間であることを説明。例のチャルメラ・メロディーを演奏すると今の子供達はチャルメラ＝ラーメン屋台のイメージは薄いとみえて反応はいまひとつ。

オーボエとバソンの面白い演奏例としてアニメ〈クレヨンしんちゃん〉の音楽の一部が吹かれると再び「オーッ（この楽器の音か……）」と驚きまじりの歓声があがる。次にアニメ〈魔女の宅急便〉から“海の見える街”をピアノ伴奏にのってオーボエが演奏すると盛大な拍手が沸きあがった。子供達の生活にアニメ文化が深く浸透していることを窺がわせた。

次はバソンの番、ファゴットとバスーンはドイツ式、バソンはフランス式のことで、材質もファゴットは楓でバソンは紫檀が使われ、指使いも音色も異なることを説明。次にオーボエとの比較で、オーボエが75センチ位なのに対してバソンは延ばせば3メートル位ある長い楽器で

低い音も出せることや音域が広いことを吹きながら説明。オーボエとバソンで同じ高さの音を比較して鳴らして音色の違いを聞かせると、子供達は「なるほど（ずいぶん違うんだな……）」と納得した反応を示していた。

バソンの演奏例はラベルの“ボレロ”である。子供達が手拍子でボレロのリズムを叩き、バソンがテーマを吹く。子供達は一生懸命だ。次に雰囲気ガラッと変えてテレビドラマ“水戸黄門”の主題歌が登場、子供達はボレロ風のリズムを手拍子で叩きながらバソンが奏でる例の“♪人生楽ありゃ苦もあるさ～”を聞く。チャルメラとは違いこちらのメロディはお父さんの影響か子供達も納得顔であった。

ピアノの紹介では、まずハンマーを手を持って示す。鍵盤を押すとアクションが動き、ハンマーのフェルトが弦を叩いて鳴る仕組みや、10本の指一つ一つを木琴のマレットになぞらえてたくさんの音が出せることを説明。子供から「押しボタンみたい」という声があがる。

ピアノの演奏例はラベルの“水の戯れ”である。黒板に大きな譜面が掲示してある。五線紙の上を分散和音が波の様にうねって並んでいるのと、ピアノから噴水の様に流れ出る音のイメージが合っていることに子供達はうなずいていた。

最後は、プーランクがピアノ、オーボエ、バソンのために作曲した「トリオ」である。オー



♪ 左からピアノ：大類朋美氏、オーボエ：萩森幸子氏、バスン：小山 清氏



♪ 今回の主役、ダブルリード楽器のオーボエとバスン

ボエとバスンの明るく或いは暗い会話風のやりとりを吹いて説明した後、第2楽章を通して演奏。その後アニメ《となりのトトロ》から“さんぽ”を演奏して明るく終了した。

4. 子供達の感想

その後、寄せられた子供達の感想は次のとおりであった。いずれも素直に感じたままを表現している。

◆モーツァルトの“アイネクライネナハトムジーク”第1楽章を聴いての感想

- ・テレビで聴いたことはあるけれど、生で聴くともっといい音が聴こえた。
- ・ピアノでしかこの曲を聴いたことがないけれど、バスン、オーボエが混じってとても愉快的な楽しい曲だと思いました。
- ・一つの楽器で弾いているように、揃っていて心に響いた。
- ・ピアノにバスンとオーボエが加わると素敵になった。
- ・同じ曲でも、楽器によって雰囲気、イメージが変わる。

◆全体を通しての感想

- ・オーボエとバスンの音にピアノが加わるといい音になったので、もっともっと聴きたかった。

- ・プーランクの作曲した曲は、悲しい曲と楽しい曲が混ざっていて分かりにくかったけれど、わくわくするような曲でした。
- ・プーランクさんの曲は、おだやかで水が流れているようで良かったです。
- ・オーボエがしゃべりかけていて、バスンは「うんうん」と言っているようだった。
- ・ストローの音がおもしろかった。
- ・いろいろなテレビにバスン、オーボエの音が出ているのがよく分かった。(クレヨンしんちゃん、魔女の宅急便)
- ・ボレロの日本版は、「水戸黄門」だということが分かった。
- ・バスンの時は黒や青、オーボエは明るい色のようだった。
- ・リコーダーに何故穴が開いているのかが分かりました。
- ・いつも聴いている時より迫力があった。
- ・オーボエ、バスン、ピアノなどの音色が暗い音になったり、明るくなったりしていた。
- ・楽器に興味がわいてきました。
- ・大好きなジブリの演奏が聴けて嬉しかった。
- ・ピアノの仕組みを初めて知った。
- ・水の曲の楽譜が水面の様に波になっているので、面白いなあと思った。
- ・ストローでリードを作ってみたいです。



♪ ストロー笛をほしがる子供達

- ・難しい楽器を簡単そうに演奏していて、すごいなあと思いました。

5. 演奏家へのインタビュー

アウトリーチ活動終了後に3人の奏者にお集まりいただきお話を伺った。取りまとめたものを次に記す。

○子供達の反応は？

- ・クラシックは敷居が高いという先入観もあるが、学校の子供達は素直に演奏空間に入ってくれる。
- ・音楽は聞き手と演奏家が全く1対1で主観的なもの、自身がどう感じるかが一番大切であるが、いままでやってきて子供達の反応は60%位は割と素直に感じたままを書いていると思う。
- ・他の活動のケースでは「孔はいくつくらいあるのか？重さはどれくらいあるのか？」といった物理的なものから、「そんなに難しい楽器なのにどうしてやろうと思ったか？どれくらいでちゃんと吹けるようになったか？」とか「音楽家にとって楽器とは？」「演奏中に何か工夫していることはあるか？」といった音楽家自身にも考えさせられるものがあった。また「友達とけんかしていたが音楽を聞いたら仲直りしようと思った」などの感想も

寄せられた。

○アウトリーチの効用は？

- ・小学生のとき生の楽器を聞いて体がビリビリするのを感じ、自分も演奏にかかわりたいと思った。同じ様な体験を感じてもらいたい。
- ・楽器をやっている子供もたくさんいるが、自分のやっていること以外にもいろいろな音楽の世界があるということを知ってほしい。
- ・素晴らしい音楽を聴いたときの感動が自分達の人生観を動かしている面があることを感じてほしい。

○なぜアウトリーチか？

- ・今、理解できなくても、子供世代にいいものを分りやすくより楽しく提供する。将来的には中学生などにも広げたい。
- ・手軽にCDなどで音楽を聴ける時代だからこそ、CDとは違う音響空間、生の音が生まれる瞬間に接して味わってほしい。
- ・音楽は瞬間芸術だから録音ではなく、生で立ち会ってその場の空気の中で感じるが一番大切である。
- ・音楽は宝の山であり、知らない音楽に接することで世界が広がる。クラシック音楽は奥が深く、全身で聞かないと深いものはつかめない。聴く側も演奏する側も全身全霊を尽くしてやらなければならない。

6. おわりに

前節の“なぜアウトリーチか？”に凝縮されているように、演奏者と子供達が至近距離の音響空間に身をおき、音楽に込められたメッセージを音の空気振動として直接的に感じ、演奏する姿にも真剣さを感じ、音楽を聴く喜び共感が養われて音楽を生涯の友として豊かな人生を送るきっかけになってほしい、との願いを込めてアウトリーチ活動は続けられている。そして、その継続が子供達の音楽への接近の機会を高め、日本の音楽文化を変化させて底上げにつながることを期待されている。

現状は、受け手の側にも認識不足があり、演奏者側にもアウトリーチを意識している人は少ない。簡単な曲ばかり演奏するのでは、と行ってやりたがらない演奏家もいる。しかし、音楽が嫌いな人は皆無であり、音楽文化は生きる証として必要であり、支えなくして成長しない。受け手送り手双方からそれらの溝を埋める様に努め、財政的にも社会が支える体制がほしい。行政、企業、財団などがアウトリーチ活動に理解を示して援護し組織的に活動できる体制になることが望ましく、人的には核となる団体やサポーターの必要性、財政的には個人や法人の会員制度、各種助成団体からの助成金支援などの充

実が望まれよう。当財団の音楽振興部門 第1回助成対象としてアウトリーチ活動が選ばれたことが、今後のアウトリーチ活動の発展に少しでも寄与できれば幸いである。

* * * * *

今回のアウトリーチ活動は2回構成のうちの初回である。2回目は1週間後に同じ場所で同じメンバーで行われ、音楽の内容により踏み込んで実践された。



♪「これもリード楽器よ！」と
チャルメラを吹く